

【小樽税務署長賞】

税金でつくる未来

小樽市立菁園中学校 三年

田辺 美乃

「税金」という言葉に、皆さんはどのようなイメージを持つだろうか。「私たちの生活に欠かせない大切なもの」「国民であれば納める義務があるもの」など浮かべるイメージは人それぞれである。

税金のある暮らしが当たり前となっている日本。私たちは、税金にどのような意識を持ち、納税という義務を果たせばよいのか。私なりに調べ、考えてみることにした。

現在の日本では、税金は社会保障関係に最も使われている。これは、国の歳出総額の約三割にあたることになる。社会保障とは、医療 福祉など私たちが生活していくために必要なサービスのことをいう。他にも公共事業関係や文教関係など、私たちが納めた税金は様々に形を変えて私たちの生活を支えてくれている。

調べているうちに、分かってきたことがある。それは、税金が大きく関わっているこの「社会保障」が、将来の日本の社会のあり方を左右する大きな鍵となってくるということだ。児童手当や年金の支給は社会保障制度に基づき行われている。この社会保障制度の基は保険料による支え合いであるが、現代社会への負担の軽減を目的に、税金や国の借金も充てている。さらに、高齢化が進む今、高

齢になれば利用する機会が多くなる社会保障制度の財源は不足し続けている。そのため、税金は社会保障にとって重要な存在になってくるのだ。

さらに、分かったことがもう一つある。それは、消費税の大切さだ。年齢に関わらず、商品を購入したときに自動的に支払われる消費税は、私たちにとって最も身近な税といえる。実際、「あらゆる世代が広く公平に分かち合うことができる」などの観点から、消費税を社会保障費の財源としている。私たちを支えてくれる社会保障は、消費税からなっているのだ。

私たちに身近な消費税は、社会保障費の財源という大きな役割を果たしていた。令和元年に行われた消費税の引き上げに反対する声は多かったと思うが、高齢化が進み、社会保障費の財源が減少し、少子化が進み、財源の基本となる保険料を負担する世代が減少してしまっている今、この引き上げはよりよい社会をつくるためのきっかけとなるといえる。消費税は、「世代に関わらず納税できる」という点で、最も日本国民にある納税の義務を果たしているといえるのではないだろうか。

「税金」と聞いて浮かぶイメージ。私も最初は、「納める義務があるもの」というイメージを強くもっていたが、調べるうち、「私たちの未来をつくってくれるもの」というイメージに変わった。数年前に待つ日本の未来。未来の社会を担う税金に「感謝」の気持ちを持つ。税金の本当の役割は何か、考えてみる。それだけで未来は、今よりも明るいものになるだろう。